Title	序 :「第二の敗戦」
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.12, 1998.3 : 3-5
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3447
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

序——「第二の敗戦」

「第二の敗戦」という言葉が俄然現実味を帯びてきた。経済不況の中の越年であった。ごく最近まで現政府は、経済の回復基調を語っていたではないか。その言葉では、日本の経済の現実を把握することはできない。それが明らかになった。それをやめた。やめたことはよいことだ。そのことは少なくとも現実に立ち返る機会となるからである。

「第二の敗戦」は、グローバリゼーションと呼ばれる世界史的変動によって惹き起こされている。「第一の敗戦」は、モダナイゼーションと呼ばれる世界史的変動に巻き込まれたことと言い得るだろう。日本は「人類普通の原理」（日本国憲法の前文）の上に立て直されることになった。それは、明治以後の日本的近代化の欺瞞性を暴露することとなった。この原理が古いエートスを克服することになる。モダナイゼーションとクローバリゼーションとは、同じ世界史的変動の、前者は時間の相における、後者は空間の相における現象の概念規定である。モダナイゼーションの進行がグローバリゼーションを拡大する。

その意味に満ちた転換のどちらをも、日本は、敗戦として経験している。経験せねばならなかった。そこに「日本史のアイロニー」（ラインホールド・ニーバーの『アメリカ史のアイロニー』参照）がある。今、大蔵省の問題で、古い

「総懺悔」という言葉がまたもや語られている。「第一の敗戦」のときの「総懺悔」の不履行が、「第二の敗戦」を必要とした。しかし、浅薄な意味でない、魂の深みにまで及ぶ「悔い改め」が必要であり、それのみが、この閉塞感を打開するであろう。

「第一の敗戦」に敗けない敗軍の将もいた。しかし、軍閥は滅亡した。総懺悔の幕が下ろされた。ところがその幕の裏で、古いエートスの問題性がそのまま官僚閥に転移した。官僚指導の戦後復興五〇年が過ぎて、日本は大きく暗転しだした。その中で驚くことがあった。「第二の敗戦」を認めない人のいることである。Sという話題の大蔵官僚は、ある評論家との対談で、憲法の全面改正を公言しだした。（中央公論3月号参照）。これは接待汚職以上に、もっと深刻な問題のように思われる。この深み、つまり古いエートスの問題性の湿地から、接待汚職のいばらがはびこった。この高級官僚の思想がその「根」を露出させている。ところで、国家公務員は、評論家とは違って、憲法遵守の義務があるのかと思っていた。が、それはわたしの誤解であろうか。いや、憲法九九条には公務員も憲法の尊重と擁護の義務の規定があったはずである。たしかに、「むかし陸軍、いま大蔵」と言われるように、「間違いを認めないところも陸軍に似ている」。しかし、明らかなことは、この官僚の自己正当化は、憲法の否定を必要としているということである。

そのような時代にあって、本研究所の総合研究のテーマは、「市民社会と国家の役割」である。新しい日本を考えているのである。このテーマとわれわれは早くから取り組んできたが、近頃日本政治学会でもこのテーマを取り上げたのことである。ここにまとめられたのは、その研究活動の一こまの記録である。グローバリゼーションとは、世界の市

民社会化という性格を帯びてもいることを、われわれは早くから見据えてきた。一九九八年四月、「第二の敗戦」は、金融のビッグ・バンとして、新しい日本の産みの苦しみとなるであろう。

一九九八年三月一日

聖学院大学総合研究所　所長　大木英夫